



「先生は、悪石島あくせきしま(ま)に彼女がいるから、毎月会いに行くんですよ」
私が担当する鹿児島赤十字病院に入院中の患者様から、皮肉まじりの言葉を受けます。毎月一回、悪石島診療のため、二泊三日の間、病院を不在にするためです。

片道11時間かかり

具体的な診療の行程は、一日目の午後十一時に鹿児島港を「フェリー」として、で出航。翌朝の午前五時すぎ、口之島に着。そこから転々と各島に寄港し、悪石島に到着するのは二日目の午前十時ごろ(片道十一時間)です。
到着直後は、船の揺れの影響

「来月はいつ」に励まされ

で身体がフラフラしているため療を開始します。約二十人前後休憩と食事ののち、午後から診療の後、夕方には健康教育などを行います。三日目は午前八時四十分発の

永井 慎昌 9期生、1986年卒



悪石島の仮面神ボゼの祭り。盆踊りの最後、旧暦7月16日に仮面神ボゼが登場する。長い棒に塗られた赤土が付くと悪魔払いになるという

鹿児島赤十字病院・悪石島診療所担当

【私の勤務地】悪石島は、屋久島と奄美大島の間に点在する7つの島々からなる十島村の南から3番目の島。鹿児島から約300km離れており、人口は約70人。鹿児島赤十字病院が、鹿児島県のへき地支援病院群の一角として、三島村と十島村の診療を担当している。

船に乗るため、七時くらいまでに検査を行います。鹿児島港に帰港するのは三日目の午後七時四十分です。

「先生、今日は波が高かったから大変だったでしょう」。診療中も多くの島の患者様から、航海の心配をしてくださいます。

つらい別れも

島の暮らしには、つらい別れが二つあります。まず、「十五の春」。島の小学生は現在九人。高校がないため、中学卒業とともに親元を離れなければならないかもしれません。しかし、この別れは、成長して帰ってくることに期待が持てる別れです。

もうひとつは、もっと厳しい別れです。島のお年寄りの大きな望みは、「島で臨終を迎えたい」ということです。しかし、介護保険の施設サービスもな

く、独り暮らしが困難となると、都会に出てくる子どもさんたちのところへ移ることが多いのです。

「先生、じいちゃんが、今度福岡の息子さんのところに行くことになりました」

「そうですか。親孝行な息子さんがいて、良かったねえ」

表面上はそう言いますが、十年も住み慣れた土地を離れ、方言が通じないところに移るのは嫌なのだろう、とは思っています。

70人の恋人

しかし、島の人々はたくましく生活しています。帰りの船に乗船する際、「先生、来月の診療はいつですか?」と聞かれまます。この言葉で、つらい航海のことなど忘れ、来月も来ようと思えます。

冒頭の、病院に入院中の患者様の言葉には、いつも「島に七十人の恋人がいて、私ぐるのを心待ちにしているのです」と答えています。

(次回予定は和歌山県)